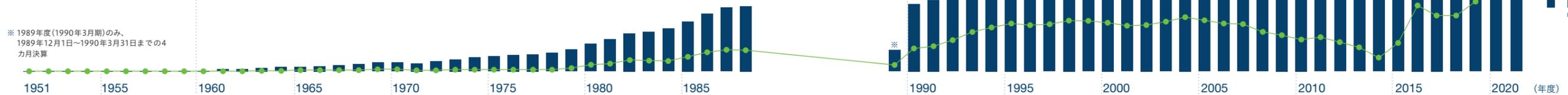


# 小野にしかできない挑戦を続け 革新的な医薬品を創製してきました。

「わたしたちにしかできない新薬がある」

小野薬品は1717年の創業以来300年以上にわたって、各時代の痛みを癒すことを考え、患者さんの健康を願い、邁進してきました。革新的な医薬品の創製に向け、現在もたゆまぬ挑戦を続けています。



## 創業から価値創造を追求

**1717**  
初代伏見屋市兵衛が大阪道修町に伏見屋市兵衛商店を創業

**1934**  
八代目市兵衛により、創業以来続いた屋号を合名会社「小野市兵衛(小野市)商店」に改組・改称



八代目 小野市兵衛

**1947**  
小野薬品工業株式会社設立。医科向け専門の創薬メーカーへ

## 画期的な医療用医薬品の開発で幅広い治療に貢献

**1960's**  
医療用医薬品へ転換

**1970's-1980's**  
自社創業により画期的な新薬を開発・上市



プロスタルモンフ注射液 (1974年)

注射用プロスタンディン (1979年)

フオイバン錠 (1985年)

**1968**  
企業として初めて、プロスタグランジンの全化学合成成功

世界初

## より多くの人々の痛みを癒す医薬品を創出

**1990's-**  
自社創業に加え、ライセンス活動を強化



オノンカプセル (1995年)

オノアクト (2002年)

ステπρα (2007年)

リカルボン (2009年)

グラクティブ (2009年)

リバスタッチパッチ (2011年)

## がん治療に新たな選択肢を提供

**2010's**  
がん領域に本格参入

**2014**  
抗PD-1抗体「オプジーボ」発売

世界初



## 常識を覆すアプローチ「がん免疫療法」 ノーベル生理学・医学賞につながる開発に寄与

2018年のノーベル生理学・医学賞の受賞者は京都大学の本庶佑特別教授とテキサス大学のジェームズ・P・アリソン教授のお二人。その受賞理由である「免疫を抑える仕組みの発見およびその仕組みを応用したがん治療法の開発」の「がん治療法の開発」を担ったのが当社でした。1992年、京都大学本庶研究室においてPD-1が発見されましたが、その機能は長く不明で、がん免疫の抑制に関与することが確認されたのは10年後の2002年のことでした。さらに、免疫の力でがんを治療するという前例のないアプローチであるがゆえに、ヒト型抗体の作製技術を有した共同開発社探しも、多くの企業に断られるなど非常に難航しました。やっと見つけた米国ベンチャー企業であるメダレックス社(2009年にプリストル・マイヤーズ スクイブ社が買収)と2005年に共同研究契約締結に至るも、2008年に日本で開始した臨床試験においても簡単には医療現場に受け入れられませんでした。幾多の困難を乗り越えた2014年7月、PD-1の発見から22年を経てオプジーボは抗PD-1抗体として世界に先駆けて承認され、同年9月に発売しました。現在、11がん腫での適応を取得し、がん治療の現場に新たな治療選択肢を提供しています。

## 不可能への挑戦、 プロスタグランジン製剤上市への道のり

戦後、本格的に大衆薬市場に参入した小野薬品。しかし、景気の変動や1961年の国民皆保険体制の確立により、大衆薬を取り巻く環境は次第に厳しいものになっていきました。そのようななか、ベルグストローム教授(スウェーデン・ルンド大学)による特別講演でプロスタグランジン(PG)と出会います。1965年当時、小野薬品はまだ研究員20名の小さな会社でした。医療用医薬品の開発がほぼ未経験の会社が、PGという得体の知れないものに立ち向かうことになったのです。当時はPGの化学合成法が確立されていなかったことから、合成方法は生合成しかなく、少量を合成するのにも多大な労力がかかりました。小野薬品は、E.J.コーリー教授(米国・ハーバード大学)がPGの全化学合成に成功したことをきっかけに、直ちに研究員を派遣。そして1968年、世界で初めてPGの全化学合成に成功した企業となりました。

“大きさに言えば、  
大西洋を西へ西へと  
サンタマリア号に乗って  
新大陸を求めた  
コロンブスの心境であります。”

小野雄造「第一回PG研究会」より



企業理念が刻まれた石碑を背に立つ小野雄造